

P2-072

乳幼児期における誤嚥の実態調査

緑 寿美子¹、小泉 創¹、脇 真由美¹、
岡 哉耶花¹、三浦 眞樹¹、太田 百合子²、
山野 裕¹

¹ アサヒグループ食品株式会社

² 東洋大学ライフデザイン学部

【目的】

乳幼児期の誤嚥事故予防の周知に努めるために、誤嚥の実態調査を行い、現状把握を目的とした。

【方法】

調査は、2016年10月20日（木）～24日（月）に子育て中の女性（20～29歳）を対象として、インターネットによる直近1ヶ月の子どもの食に対する実態調査を行った。子どもの年齢は9か月～5歳までを9区分とし、1区分200人の計1,800人について、「誤嚥した、誤嚥しそうになった」数を比較した。なお、食品は複数回答とした。

【結果】

「誤嚥した、誤嚥しそうになった」子どもの割合は、9か月以上12か月未満が29.5%（59人）と最も多く、年齢が上がるにつれ減少するものの、5歳でも4.5%（9人）あった。誤嚥した、誤嚥しそうになった食品別事例件数（複数回答）でみると、全体で306件あった。年齢ごとに比較すると、9か月以上12か月未満66件、15か月以上18か月未満56件、12か月以上15か月未満52件、18か月以上24か月未満35件の順位であり、2歳未満で全体の68.3%を占めていた。食品内容は、全体でパン類37件、米類37件、肉類29件、麺類28件、果物類24件の順位であった。年齢ごとの比較で上位3位までを比較すると、どの年齢でもパン類、米類、麺類の主食が上位を占めていた。2歳未満は果物類や野菜類、汁物、飲料が、2歳以上は肉類、いも類、餅、海苔、餡が上位に含まれていた。

【考察】

どの年齢においても主食は誤嚥しやすい結果となった。特に、パンなどの水分量の少ないものは水分を多く含むよう調理することが必要であると考ええる。また、低月齢では汁物や飲料の誤嚥も多く、液体はむせないように大人が水分量を加減したり、とろみをつけたりするなどの工夫が大切である。

今回は、10月の限定した範囲での調査だったが、行事食による誤嚥や窒息事故が他からも報告されていることから、食べさせるときは十分注意する必要がある。特に咀嚼機能が未熟な乳幼児期は、自分の許容量が判らず、次々と詰め込んでしまうことも考えられる。

【結語】

乳幼児期の食事の配慮として、咀嚼に合せて食材を適度な固さに調理することや、小さく切る等の工夫が必要である。子どもに対しては、食べるときは咀嚼できる適量を学習させ、口腔内で食べ物と唾液とを十分混ぜ合わせる咀嚼の練習が重要である。また、子どもが食べるときは、大人の見ている前で座って食べることや、食品の誤嚥事故のリスクを周知することが重要であると考ええる。

P2-073

幼児期のテクスチャー嗜好の違いによる間食の嗜好性の検討

瀬尾 知子、佐々木 信子、長沼 誠子

秋田大学教育文化学部 こども発達・特別支援講座

【問題と目的】

幼児期の咀嚼と食嗜好は、人間の生涯の食と健康に影響するといわれており、咀嚼と食嗜好の関連に関して関心が高まっている。しかし、幼児はよく噛んで食べる食べ物を好むのか、あるいはあまり噛まなくても食べられる食べ物が好きなのかといった、咀嚼と食嗜好の関連に関する研究は非常に少ない。瀬尾、佐々木ら（2017）は、幼児の食嗜好に影響を与える食感的要素であるテクスチャーの嗜好性に焦点をあてて、幼児のテクスチャー嗜好は年齢によるものではないことを明らかにした。さらに、年齢に応じた食べ方指導を行う上で、幼児の咀嚼と食嗜好の関連を検討する必要がある。

本研究では、柳沢、田村ら（1989）の咀嚼筋活動量の食物分類にしたがって、好きな間食に関する食物の噛み応え度の分析を行い、テクスチャーの嗜好性の違いにより、食の嗜好性は異なるのか、検討することを目的とする。

【方法】

幼稚園、保育所に通う幼児139名（年少37名、年中46名、年長56名）を、テクスチャー嗜好として、硬いビスケットが好きな幼児49名、普通の硬さのビスケットが好きな幼児35名、やわらかいビスケットが好きな幼児50名の3つの群に分類した。次に、咀嚼筋活動量による食物の分類にしたがい、好きな間食の内容を、噛み応えのないものから順に10段階に分類した。さらに、咀嚼活動筋量1と2を咀嚼活動筋量弱群、咀嚼活動筋量3と4を咀嚼活動筋量普通群、咀嚼活動筋量5以上を咀嚼活動筋量強群として3つに分類した。

【結果】

はじめに、幼児のテクスチャー嗜好と好きな間食の噛み応えの関連を検討するため、幼児のテクスチャー嗜好3（硬い、普通、軟らかい）×咀嚼活動筋量3（弱い、普通、強い）の検定を行った。その結果、テクスチャー嗜好の違いによる偏りに有意差がみられ（ $\chi^2(4) = 9.06, p < 0.05$ ）、硬いビスケットを好む子どもの方が、普通の硬さや軟らかい硬さのビスケットを好む子どものよりも噛み応えのある間食を好むことが明らかになった。一方、普通のビスケット、軟らかいビスケットを好む子どもの有意差はみられなかった。

【結論】

本研究では、テクスチャー嗜好の違いにより、間食の嗜好性が異なることが明らかになった。本研究の結果から、子どもの咀嚼を促す取り組みは、テクスチャー嗜好を考慮し、幼児個々に適した指導を行うことが重要であることが示唆された。